

ハイフレックス型国際協同学習のデザインと学習成果—アイヌ文化の展示解説を事例として—

札幌国際大学 杉江聡子 satoko-sugie@ts.siu.ac.jp

【発表要旨】 本研究は、大学におけるハイフレックス型 (Hybrid-Flexible: HyFlex) の授業形態において、地域文化をテーマとして国際協同学習を行う場合の最適なインストラクショナルデザインを探究することを目的とする。そのために、縄文・アイヌ文化に関する博物館ガイドをテーマとした国際協同学習を行い学習成果物と学習者視点の認識に基づき質的に分析した。学習者は日本人のみや留学生のみの環境では得られない経験や成果を認識し、国際協同学習環境での学びを更に深めたいという意欲が形成された。

【目的】 グローバル化に伴い、教育や学習の現場も国際化が急速に進んでいる。将来的に多言語・多文化環境で協働するための準備段階として、学校教育の下でも文化的なテーマに関する共同学習を通じた学びの意義の発見や課題発見・解決型学習が重要となる。そこで本研究は、ハイブリッド型の遠隔授業形態において、地域固有の文化を題材として日本人と留学生の協同学習を行う場合の適切なインストラクショナルデザインを探究することを目的とする。

【方法】 ハイフレックス型の授業として、縄文・アイヌ文化に関する博物館展示解説ツアー、国際協同学習環境におけるオンライングループワークによる調べ学習、展示物を中心とする縄文・アイヌ文化解説のオンラインプレゼンテーション、及び多言語資料の作成から成る活動を行った。テキストチャットによる学習者間の話し合いの記録、プレゼンテーション動画、成果物 (発表資料と多言語パンフレット)、授業評価アンケートの回答を総合的に分析した。

【学習者と活動】 教育実践のフィールドは、地方私立大学の観光学部で、2020 年度秋学期、週 1 コマ (2 単位) の必修授業である。学習者について、留学生クラス (発表者担当科目) は、大学での学びの基礎力を育成することを目指し、スライドやレジュメを用いたプレゼンテーションスキルを修得することを目的としている。渡日前留学生は 3 名 (韓国、中国、ベトナム) で、ベトナム 1 名のみ学期途中で渡日した。日本人クラスは、人文学部の学芸員資格取得のための実習を中心とする選択科目である (担当教員は発表者とは別の 2 名)。授業の構成は、15 コマのうち留学生クラスと日本人クラスの合同授業 5 回、合同授業のための準備・振り返り学習 4 回 (残り 6 回は図書館ガイダンス、学年合同セミナー、全体発表会等) となった。遠隔授業のツールは zoom と Microsoft Teams を用いて、博物館ツアー (対面+遠隔)、展示解説企画・資料作成のグループワーク (遠隔)、成果発表のプレゼンテーション (遠隔) を行った。zoom は授業開始・終了時の全体連絡の場であり、活動は主に Teams 上で、資料の共有、グループチャットによる話し合い、プレゼンテーションスライドの共同制作を行った。

【結果と考察】 学習者は、学年、専攻、縄文・アイヌ文化に関する背景知識、日本語の習得レベル (母語話者か学習者か)、異文化間コミュニケーション経験などの面で個人差が大きかったものの、日本人のみ、あるいは留学生のみの学習環境では得られなかった経験を通じて学習の成果を発見した。このような国際協同学習環境での学びをさらに深めたいという意欲が形成された。学習は「自分事」である場合に最大化されることから、自分たちが住む地域の文化をテーマとしてグローバルな視点で学ぶ活動のバリエーションを増やしていくことが有効であると考えられる。

【今後の課題】 先行研究で指摘されてきたような、対面と遠隔を同期的に実施する場合の学習者支援の難しさ (一方が「置いてきぼり」になり、過剰に介入しがち) が最大の課題である。また、学習者 (特に渡日前留学生) の通信環境や使用デバイスの相違による環境依存問題に対する個別対応、授業運営を支援する技術人員の確保、学習者の視点に立った有効な学習支援によるフリーライダー対策などが今後の課題として残された。